

研究論文

弥生時代中・後期における方形周溝墓の地域性と展開

— 遠江・駿河・相模地域を対象に —

塚本紘太郎

要 旨

方形周溝墓研究は 1964 年の宇津木向山遺跡から始まった。方形周溝墓は、検出事例の多い近畿、東海、関東地域で盛んに研究され、方形周溝墓の出現については弥生時代前期に近畿地域に出現し、その後諸地域へ伝播したということで概ね理解されている。しかし、これまでの研究では、異なる地域同士を比較、分析した研究はあまりみられず、多くの研究はその地域内での分析に留まっている。そこで本論では東海地域と関東地域に繋がる遠江、駿河、相模地域の 3 地域の方形周溝墓について比較検討を行い、その展開や地域性がどのようなものであったのかを考えていった。

本論では方形周溝墓の大きさ、平面形態、主体部の数、単位群、副葬品の 5 項目を設定し、分析を行った。その結果、弥生時代中期と後期にこれらの項目に大きな変化がみられ、展開についても 3 地域の方形周溝墓は弥生時代中期中葉に出現し、西遠江から相模地域まで西から東へ伝播しているのに対し、後期の変化は東から西へと広がっている可能性を示す結果が得られた。

キーワード：弥生時代、遠江、駿河、相模地域、方形周溝墓

はじめに

方形周溝墓は 1964 年に宇津木向山遺跡の発掘調査によって発見され、大場磐雄によって「方形周溝墓」と命名された遺構である。方形周溝墓に関する研究は検出事例の多い近畿、東海、関東地域を中心に盛んに行われ、その分類や大まかな伝播状況は判明しているが、各地域を比較した研究はあまりなされていない。そのため、本論では東海地域と関東地域をつなぐ遠江・駿河・相模の 3 地域の方形周溝墓を比較検討し、詳細にその地域の状況を分析することで東海地域から関東地域へ方形周溝墓がどのように伝播していったのかを考察していく。

1. 研究史

(1) 先行研究

方形周溝墓の分類と伝播に関する研究 初期の方形周溝墓研究は大場磐雄が八王子市の宇津木向山遺跡で、方形で周溝をもち、中央に土坑が存在し、かつガラス玉が確認されたことから、この遺構が墓であると推察した。大場はその後複数の類例を確認し、これが古墳の過渡期にあたる墓制であると推測した(大場 1973)。この古墳への過渡期にあたる墓制という考えはその後の研究者に引き継がれ、和島誠一は全国の方形周溝墓を集成し、方形周溝墓はある特定人物の個人墓である

と考え(和島 1966)、内藤晃は古墳に至る墳墓の中でも方形周溝墓はその初期段階の墓制であると考えた(内藤 1967)。また、沢田大多郎は方形周溝墓と同時期にベッド遺構等を伴う住居が確認できることから、方形周溝墓の被葬者は他の墓制とは区別されていたと考えた(沢田 1967)。

1970 年代後半から方形周溝墓の確認事例が増加することで研究が進み、方形周溝墓そのものの分類が進んだ。また、古墳の過渡期である墓制という認識に変化が生じ、近藤義郎や金井塚良一によって指摘はされていた(近藤 1969、金井塚 1972)、古墳との直接の関係を否定する指摘が増加する。また、水野正好は、方形周溝墓は個人墓というより家族墓としての性質が強いと指摘した(水野 1972)。この家族墓という考えは他の研究者にも引き継がれ、小林三郎は複数埋葬の存在、方形周溝墓自体が集合体を形成していることから、ある人物が著しく他の人々から隔絶された埋葬によって墓を形成しているわけではないとし、方形周溝墓は血縁関係を基調とする共同体の関係を表しているとした(小林 1979)。また、確認事例が増加することで伝播状況も見えてくるようになり、甲元真之は前期末に池上遺跡、四ツ池遺跡などに見られ、中期前半に近畿諸地域へ、中期後半に東海・北陸へ伝播することを確認した(甲元 1979)。この近畿地域が初源であり、そ

の後各地域へ伝播するという見解はその後の研究でも支持されており、山岸良二は、方形周溝墓は畿内から他の地域へ伝播する過程でそれぞれの在地性の特徴を取り込んで発展したと指摘し（山岸 1981）、前田清彦は全国の方形周溝墓の平面形態を分類し、初源は畿内であり、それが全国へ波及したと確認した。また、平面形態を分類した結果四隅が全周する畿内系と四隅が欠ける東海系の2種を抽出した（前田 1991）。

2000年代になるとこれまでの方形周溝墓研究の見直しが行われ、及川良彦はこれまで方形周溝墓としてきたものの中には周溝を持つ建物も含まれている可能性に言及し、再検討が必要であると述べた（及川 2005）。また、家族墓という共通認識も再検討され、黒澤浩は方形周溝墓の埋葬施設は縄文時代にはみられない木棺墓が多いことから、方形周溝墓は外来の要素が強いとした（黒澤 1996・2015）。大庭重信は、中村大介と秋山浩三の供献土器の穿孔の共通性から、方形周溝墓を営む集団は世帯というよりはクラン・サブクラン規模の集団であったという指摘から（中村 2004）、大阪市の方形周溝墓を取り上げ、中期～後期前半の多数埋葬は系譜関係に基づいて累世的に利用されたのではなく、同時代を生きた一定集団の埋葬域であったと指摘し、多数埋葬は墓群形成の契機になることも多いことから、墓群を形成した集団は世帯や家族よりクラン・サブクラン規模の集団であった可能性が高いと中村大介の考えを支持した（大庭 2005）。一方、藤井整は方形周溝墓に乳幼児が埋葬される事例を挙げ、死亡率の高い乳幼児の埋葬が区画内では少数であることと、乳幼児が埋葬される場合は多数埋葬であることから、方形周溝墓に埋葬される人々の地位は世襲的であり、また方形周溝墓の出現期の遺跡である東武庫遺跡にも見られることから、出現期から被葬者の地位は世襲的であったと考えた（藤井 2005・2015）。また、これまで方形周溝墓自体を主題とした研究がなされてきたが、若林邦彦は方形周溝墓と集落の関係を分析し、近畿地域の多くは集落の近くに方形周溝墓を造営し、集落の半径が100m以上である中規模以上の集落に方形周溝墓は営まれていたと指摘した（若林 2005）。そして、最近の研究では韓半島との関係性に関する研究も行われており、中村大介は朝鮮半島の方形周溝墓を取り上げ、青銅器時代の周溝墓は地上式であることから、日本の弥生時代前期後葉に出現する方形周溝墓と共通点があるものの、朝鮮半島のものは細長方形であり、さらに時期にも隔たりがある上朝鮮半島南部での例も稀であることから、朝鮮半島とのつながりは存在するも

の、直接伝播したとは考えづらいと指摘した（中村 2015）。

対象地域の方形周溝墓に関する研究 遠江、駿河地域の方形周溝墓研究は、1980年代後半から行われ始めた。中島郁夫は静岡県の弥生時代中期の方形周溝墓を集成し、静岡県では方形周溝墓は弥生中期中葉に出現し、中期後葉になると、平面形態が円形になり、四隅切れ以外のものが出現することを確認した（中島 1988）。また、石黒立人は東海地域の方形周溝墓を取り上げ、方形周溝墓の分布圏と土器棺墓の分布圏には隔絶があり、両者は排他的な関係にあったと考えた。特に四隅切れ型はこの傾向が強く、四隅切れがなくなるとともに埋葬施設が3つ以上になり、土器棺墓を取り込むようになると指摘した（石黒 1988・2009・2016）。伊藤敏行は関東地域では複数埋葬と単独埋葬の二系統が初期段階から並列していることを確認した（伊藤 1996）。このように、対象地域では弥生時代中期中葉に方形周溝墓が確認できるようになり、その平面形態は四隅切れ型をとっていたということが分かっている。中島や伊藤らの研究を踏まえ、篠原和夫は遺跡展開の様子から、東海東部から関東にかけて中期中葉に本格的な水田耕作が始まるとされることから、方形周溝墓はこれと同時期に始まると考えた。そして、中期末から後期に方形周溝墓に変動が見られることに関して、原因の1つとして凹線文土器の波及が関係しているのではないかと考えた（篠原 2010・2023）。

また、最近ではより地域を細分化した研究を行う流れも見られ、宮腰健司は東海西部の方形周溝墓の様相に関して、中期後葉に朝日遺跡などで、それまでの方形周溝墓の墳丘を切って新たに造成するようになることから、この時期の特徴として既存の周溝墓、あるいは造墓方法を否定あるいは変える形で造墓される点を挙げた。そして後期前半には地域ごとに非常に特徴的な墓制や墓のあり方が見えるようになる一方で、そうした変化は墓域の一部あるいは墓制の一部にとどまることを確認し、後期後半では、墓坑から鏡が出土したり、墓が大型化したりするものが現れることを確認した（宮腰 2010）。毛利舞香と小泉祐紀は大井川から富士川までの西駿河地域の方形周溝墓を集成し、弥生時代後期前半に方形周溝墓が激減することを確認した。また、東駿河地域でも墓の減少が確認できたのに対し、西遠江地域では丘陵部に方形周溝墓群が展開するという隣接地域間の差異についても提示した（毛利、小泉 2023）。井口美奈は弥生時代中期を中心に遠江地域の方形周溝墓を集成し、中期中葉では海岸平野上の浜堤

列や丘陵・段丘上に築造するという共通性が見られたが、中期後葉になると墓域の立地や墓の形態に多様性が見られることを確認した(井口 2023)。古屋紀之は南関東の方形周溝墓を取り上げ、出現が中期中葉であり、平面形態が四隅切れから隅が1つ切れるものとなり、後期後葉に全周型が増加することを確認した。また、このことは東海地域でも共通してみられるとして、両地域が深く関係していると推察している。また、埋葬施設が1基のものが大半であることから、南関東の方形周溝墓が単純な「家族墓」であったとは考えにくいと考察している(古屋 2023)。

(2) 先行研究の到達点と課題点

先行研究の到達点 先行研究の到達点としては、方形周溝墓の伝播、平面形態の変遷、群構成など方形周溝墓そのものを対象とした研究が多く、その結果、日本における方形周溝墓の伝播状況、平面形態の変遷に関しては、近畿地域から東海、関東地域等の諸地域へという大筋は判明していると言える。

課題点としては、方形周溝墓そのものに関する研究が盛んに行われている一方、方形周溝墓を造営する集団同士の関係性やこの集団がどのような社会を形成していたのかといった、方形周溝墓そのものから離れた研究はあまり多いとは言えない。また近畿・東海・関東以外の地域、より細かい地域を対象とした研究にはばらつきがあり、地域の細部の状況に関する検討はあまりなされていない。

(3) 研究の目的

分布、平面形態、規模、主体部、単位群構成、副葬品から、遠江、駿河、相模地域では方形周溝墓がどのように展開されてきたかを探り、その地域性や共通性を明らかにすることを目的とする。また、方形周溝墓導入前の墓制である土器棺墓、土壙墓と方形周溝墓の分布状況を比較し、各墓制を営む集団の関係性を明らかにする。

2. 定義

各定義の設定 本論で取り扱う方形周溝墓は福田聖の研究を参考に、周溝の幅が1m以上、深さ0.5m以上のものを方形周溝墓として扱う(福田 2005)。この基準は、方形周溝墓とされるものであっても、調査区外のために溝が1条のみ検出される事例が存在し、区画溝の可能性が存在するためである。

時期は弥生時代に属するものを対象とする。また、

弥生時代は中期と後期に大別し、可能な場合は土器型式の時代区分から弥生時代中期は前葉と中葉、後葉の3段階に、後期は前半と後半の2段階に細別するものとする。また時期決定は最も新しく完形に近い土器を儀礼が行われた時期、すなわち方形周溝墓利用時期のものと判断し、それを時期判断の対象時とする(佐藤、萩野谷・篠原 2002、伊丹・大島・立花 2002)。

主体部は土坑、木棺、土器棺と呼称する。なお、ここでいう土坑墓、土器棺墓は方形周溝墓導入前から存在する、それ単独の墓制を指すものとする。

分析対象(図1) 遠江、駿河、相模地域から検出された方形周溝墓を分析対象とする。これには埋葬施設が見つかっていないものも対象に含めるものとする。また、埋葬施設の見つからない土坑墓、土器棺墓は報告書の記載に準拠する。

分析手法 平面形態、大きさ、主体部の数、単位群、副葬品の5つの視点から分析を行う。地域は遠江、駿河、相模地域の3つに大別し、とくに遠江、駿河地域は天竜川、大井川、富士川を境に西から西遠江地域、東遠江地域、西駿河地域、東駿河地域の4地域に分ける。

3. 方形周溝墓の分析

(1) 平面形態の分析

前田清彦、石黒達人の分類案を参考に、周溝が全周する全周型、四隅が切れる四隅切れ型、四隅の内1つ以上の隅が切れて1つ以上隅が切れない隅切れ型、一辺の中央が途切れる辺切れ型の4つに分類する(図3)。平面形態はその共通性が集団のアイデンティティを示している可能性が考えられるため、この分析を行った。

中期中葉(図6) 方形周溝墓が出現する時期であり、対象地域全体で四隅切れ型が大多数を占めるなか、隅切れ型と全周型をわずかに確認された。しかし、大井川以西の遺跡では全周型は確認できず、大井川以東で全周型が出現していることが確認でき、若干の地域差が確認できる。

また、四隅切れ型が確認できる遺跡では隅切れ型や全周型も確認できることから、異なる平面形態の方形周溝墓を造営する者同士が1つの集団を形成していることが分かる。しかし、大井川以西では平面形態の違いにかかわらず、いずれも平野部や丘陵の裾部などの比較的標高の低い地点に造営されているのに対し、西駿河地域に関しては、四隅切れ型のみのは平野部に、他の平面形態が混ざるものは標高の高い地点に造営されるという特徴が確認された。



図1 対象地域内で方形周溝墓が確認できる遺跡

1 角江遺跡 2 梶子北遺跡 3 中村遺跡 4 城山遺跡 5 将監名遺跡 6 北神宮寺遺跡 7 東原遺跡 8 祝田遺跡 9 芝本遺跡
10 矢畑遺跡 11 椿野遺跡 12 馬坂遺跡 13 団子塚遺跡 14 鹿島遺跡 15 宇佐八幡境内遺跡 16 山下遺跡 17 掛之上遺跡
18 愛野向山遺跡Ⅱ 19 新豊院遺跡 20 京見塚遺跡 21 元島遺跡 22 久保之谷遺跡 23 広野北遺跡 24 北山遺跡 25 川田・
東原田遺跡 26 大谷横穴 27 文殊堂遺跡 28 林遺跡 29 フケ遺跡 30 鴨山遺跡 31 高尾向山遺跡 32 中屋敷1号墳 33 網
掛山1号周溝墓 34 片瀬遺跡 35 上の平遺跡 36 駿河山遺跡 37 鷹の道遺跡 38 瀬名遺跡 39 有東遺跡 40 恩田原遺跡
41 川合遺跡 42 手越向山遺跡 43 能島遺跡 44 道場田遺跡 45 花倉大柳遺跡 46 長伏六反田遺跡 47 滝戸遺跡 48 西洞遺
跡 49 城山遺跡 50 植出遺跡 51 青木原遺跡 52 富士岡1古墳群 53 ニツ洞遺跡 54 多古上山神遺跡 55 根丸島遺跡
56 久野多古境遺跡 57 仏向遺跡 58 中野桜野遺跡 59 池子遺跡 60 上倉田遺跡 61 砂田台遺跡 62 ひる畑遺跡 63 城際遺
跡 64 千代光海端遺跡 65 E5遺跡 66 打越遺跡 67 大原遺跡 68 王子ノ台遺跡 69 明神台遺跡 70 大会原遺跡 71 原口
遺跡 72 海老名本郷遺跡 73 大蔵東原遺跡 74 そとごう遺跡 75 七堂伽藍跡 76 鶴巻南遺跡 77 宮山中里遺跡 78 三ノ宮
・下谷戸遺跡 79 六ノ域遺跡 80 権田原遺跡 81 中里遺跡 82 千代北町遺跡 83 石田・大久保遺跡 84 岡田遺跡 85 永塚長
森遺跡 86 三ノ宮・下木津根遺跡 87 若尾山遺跡 88 池端地区遺跡 89 西見谷西遺跡 90 社家宇治山遺跡 91 南原B遺跡
92 歳勝土南遺跡 93 北川貝塚 94 歳勝土遺跡 95 河原口坊中遺跡 96 恩名沖原遺跡
1～10 西遠江地域 11～36 東遠江地域 37～45 西駿河地域 46～53 東駿河地域 54～96 相模地域

中期後葉(図7) 四隅切れ型が主流となるのは変わ
らないものの、大井川以西では隅切れ型が確認できる

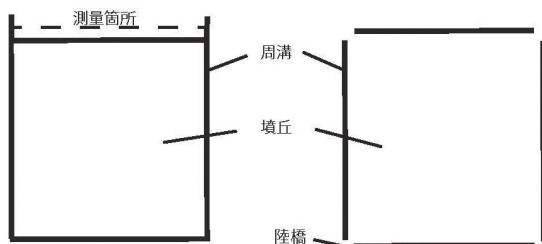


図2 方形周溝墓各部位名称

遺跡数の増加と全周型の出現が確認できた。また、基
本的に隅切れ型や全周型が確認できるのは四隅切れ型
と同一の遺跡内であるが、東遠江地域と相模地域では
久保之谷遺跡や新豊院山遺跡、砂田台遺跡のように、
四隅切れ型を伴わずにそのほかの平面形態が確認でき
る遺跡がわずかながら出現している。これは後述の後
期に見られる現象であるため、この2地域で先行的に
こうした四隅切れ型からの転換という現象が発生して
いたのではないかと推察される。

各形態の分布については、西遠江地域では中期中葉

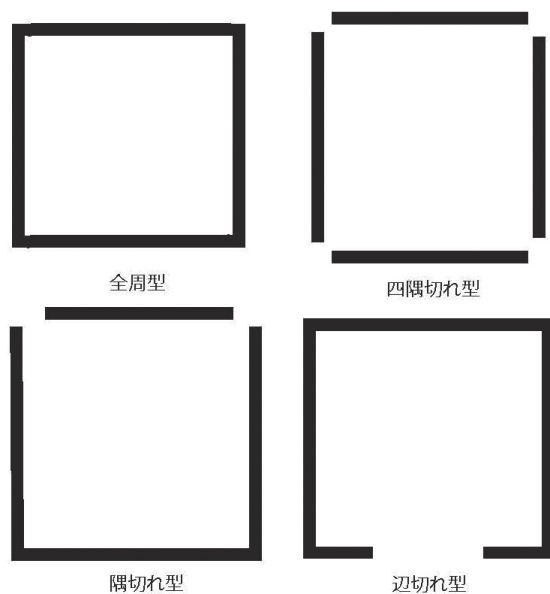


図3 平面形態模式図

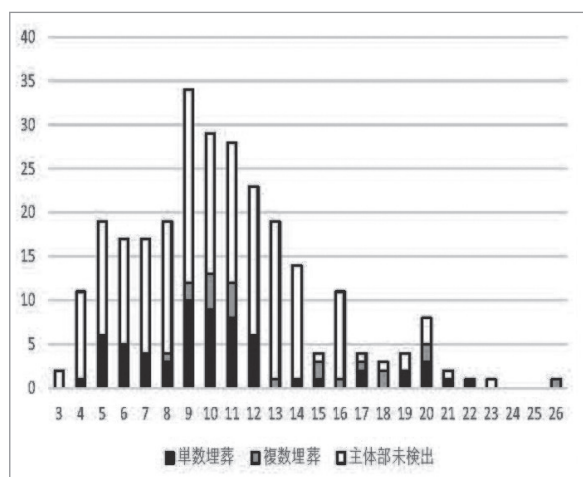


図4 大きさと埋葬手法グラフ

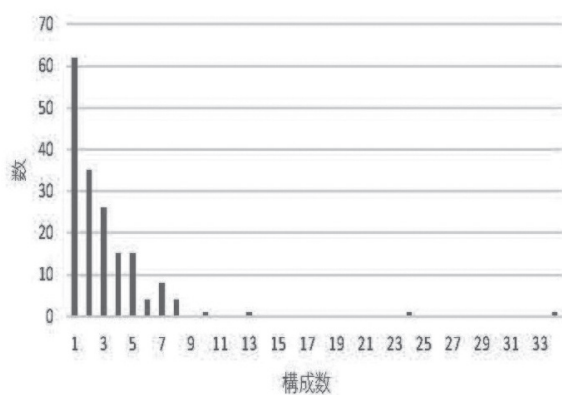


図5 単位群の構成基数

と比べ大きな変化は起きておらず、北神宮寺遺跡のみ標高の高い地点で造営されている。一方、東遠江地域では久保之谷遺跡や新豊院山遺跡、大谷横穴群のよう

に、高い標高に立地する遺跡の数が増える。また、平面形態によって分布に違いが見られ、四隅切れ型は標高の低い地点に分布するものが多いのに対し、隅切れ型はほとんどが標高の比較的高い地点に分布し、全周型は標高の低い地点にのみ分布している。こうした平面形態の種別による分布の違いは相模地域でも確認でき、こちらの地域では四隅切れ型の分布状況は共通しているもの、全周型は標高の高い地点でのみ造営されているという違いが存在している。

後期前半 (図8) 全ての地域で四隅切れ型が減少し、隅切れ型、全周型が増加する。しかし、大井川以西では四隅切れ型が継続しているのに対し、大井川以东では四隅切れ型がほとんど見られなくなる。また、この時期は大井川を境に方形周溝墓の検出件数に大きな差が見られる。

分布については対象地域全体に共通する傾向は見られず、小地域ごとに異なる傾向がある。まず、西遠江地域において中期後葉から継続する遺跡は平野部に分布しており、標高の低い地点での造営が多く、形態に応じた造営立地の違いは確認できない。

東遠江地域は四隅切れ型と隅切れ型は丘陵上にも造営されているのに対し、全周型は丘陵裾部にのみ造営されている。

東駿河地域は隅切れ型が標高の高い立地に造営され、全周型は標高の低い地点に造営されるという結果が得られた。しかし、完形の事例が少ないため、確実にそうであったかどうかについては不明である。

相模地域では、隅切れ型は標高の低い地点での造営が多いものの、標高の高い地点にも造営され、あまり差異は確認できない。しかし、全周型は標高の低い地点で造営されており、標高の高い地点には造営されない。

後期後半 (図9) 後期前半に四隅切れ型が継続していた地域でも激減する現象が確認できており、標高の高い地点で分布するようになる。しかし、方形周溝墓の平面形態による造営地点の標高の差異というのは、相模地域を除きあまり確認できない。

相模地域では隅切れ型は標高に関係なく造営されるが、全周型は標高の高い地点にのみ造営される。ただし、全周型が確認できる遺跡には隅切れ型も確認でき、また、同一の遺跡内に隅切れ型が存在しなくともその近辺には隅切れ型が存在することから、完全につくり分けていたわけではないということが分かる。

小結 導入期である中期中葉は全ての地域で四隅切れ型が主流となるが、分布と立地は地域間で異なる。ま

た、わずかながら隅切れ型や全周型を確認することができ、導入段階で既に四隅切れ型以外の形態が入ってきていたという結果が得られた。

中期後葉も四隅切れ型が主流だが、全周型の出現あるいは増加といった変化が見られたが、駿河地域ではこの変化があまり見られず、東遠江地域と相模地域では他地域よりも変化が大きいという結果が得られた。この変化は後期に見られる四隅切れ型以外の形態の増加につながるため、この両地域では他地域に先駆けて変化がみられる。

後期になると、全ての地域で中期に見られたような四隅切れ型主流から隅切れ型、あるいは全周型主流に変化するという現象が見られた。しかし、どの形態が主流となるかは地域間で差異が存在することが分かった。

また、後期後半になると四隅切れ型がほとんど確認できず、東遠江地域と相模地域では辺切れ型といった特異な形状が出現する。これは他の地域では確認できないことから、東遠江地域と相模地域の集団というのは他地域の集団よりも近い関係であった可能性が考えられる。しかし、東遠江地域では同一の遺跡内で異なる平面形態の方形周溝墓が確認できることが多いのに対し、相模地域では隅切れ型においてのみ、同一の遺跡内に他の平面形態の方形周溝墓を確認できない事例が多い。そのため、近い関係にあったと推察される両地域の集団でも、隅切れ型に限定してではあるが、平面形態の種別による違いが存在することが分かった。

(2) 大きさと主体部数の分析

方形周溝墓の大きさと主体部数は比例するか、また、大きさに違いがあるのであればそれは地域差によるものか、あるいは被葬者の力の大きさによって方形周溝墓の大きさが変わるのかを調べるために分析を行った。

方形周溝墓の短辺の長さ、複数埋葬の出現を複合的に判断した結果、短辺が8.0m未満のものを小型、8.0m～18.0m未満のものを中型、18.0m以上のものを大型とする(図4)。また、方形周溝墓の検出状態には周溝が調査区外のために検出されていない事例なども存在し、このような場合、正確な大きさを測定できないため、ここでは完形のもののみを対象とした。なお、測定地点は周溝を含めた東西長と南北長であり、最も長い地点を計測した。

主体部と見なすものは、方形周溝墓の墳丘、周溝に造設されたものを対象とし、棺は木棺、土器棺、土坑の3種に分類するものとする。

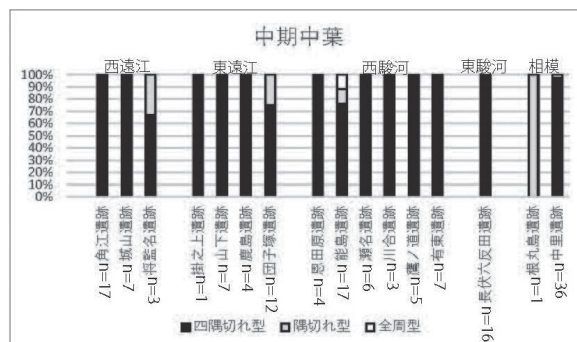


図6 中期中葉の遺跡別平面形態の割合

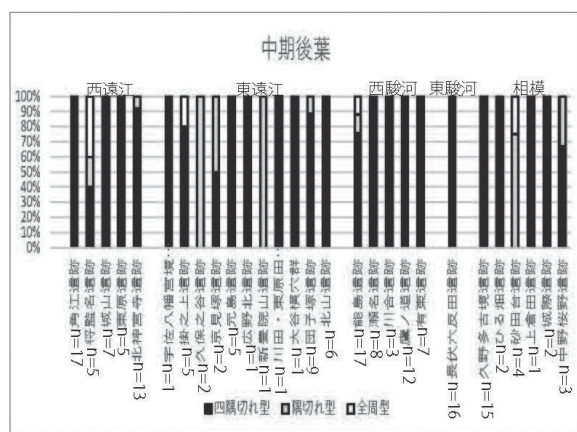


図7 中期後葉の遺跡別平面形態の割合

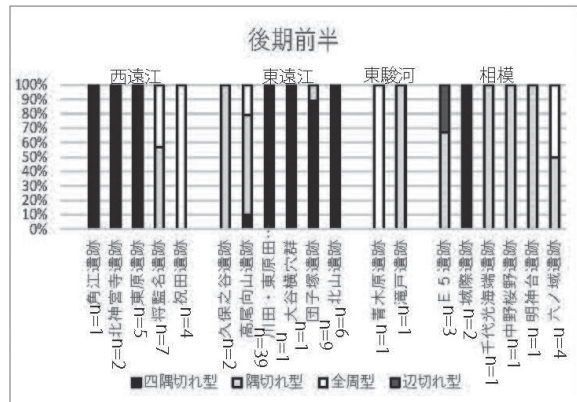


図8 後期前半の遺跡別平面形態の割合



図9 後期後半の遺跡別平面形態の割合

中期中葉(図 10・11) 中期中葉は西駿河地域を除いて、中型が主流でそこに若干数の小型が混在するという傾向となる。西駿河地域では、川合遺跡や恩田原遺跡のように大型の方形周溝墓が検出されている。また、上原遺跡では一辺 26m で単数埋葬の方形周溝墓が検出されており、導入段階で大型の方形周溝墓を造営するような社会が駿河地域に存在していた可能性がある。

主体部に関しては、いずれの地域でも単数埋葬が主流で、複数埋葬の場合でも 2 基のものが多く、それ以上のものは非常に少ない。また、埋葬施設の種類も木棺と土坑を主としていることは共通している。しかし、東遠江地域の宇佐八幡宮遺跡では主体部に土器棺を使用し、将監名遺跡では土器棺墓が方形周溝墓に隣接して造営されている事例が存在する。一方、大井川以東では土器棺墓が方形周溝墓の近辺で確認できないため、導入段階で既に大井川を境に埋葬形態に違いが存在した可能性が考えられる。

地域全体で標高の低い地点での造営が多いが、西駿河地域では標高の高い地点にも造営がされている。

中期後葉(図 12・13) 該当地域全体で中型が主流となる傾向は変わらないものの確認事例が急激に増加し、大型の分布域も東遠江地域と相模地域にまで拡大する。大型は、西駿河地域では中期中葉と同様に 20m を超えるものが見つかり、相模地域でも数は少ないが確認した。一方で、東遠江地域では駿河地域と相模地域の最大の大きさのものに比べ、大型でも小さいものが検出されている。

主体部は、単数埋葬が主流で、複数埋葬でも 2 基のものがほとんどである。主体部の種別は遠江、駿河地域では木棺が主流となるが、相模地域では土坑の割合が増加しており、若干の地域差が確認できる。また、中期中葉と同様に、土器棺は東遠江地域で最も確認されており、相模地域では 1 例が確認されたのみである。

分布状況については、遠江地域内で変化が生じており、西遠江地域では標高の低い地点での造営が主流となるが、東遠江地域では丘陵上などの標高の高い地点での造営が多くなる。

後期前半(図 14・15) 中型が最も多いが、東遠江地域と相模地域では他の地域と若干異なり、東遠江地域では大型が確認できるのに加えて、中期後葉に存在していた小型がこの地域にのみ残存しており、相模地域でも大型が確認できる。

主体部は木棺と土坑が多いが、土器棺が東遠江地域からさらに西の、西遠江地域まで分布域が拡大した。また、東遠江地域では土器棺の割合が増加する。

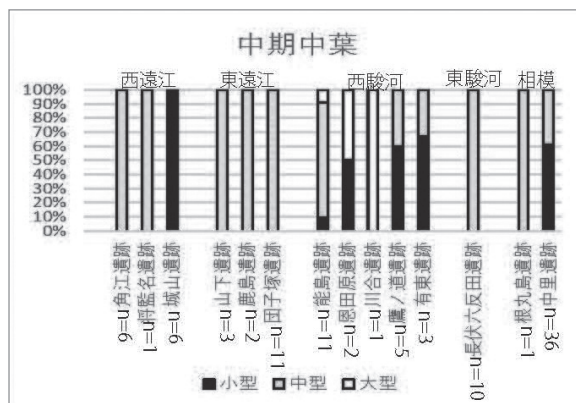


図 10 中期中葉の遺跡別大きさの割合

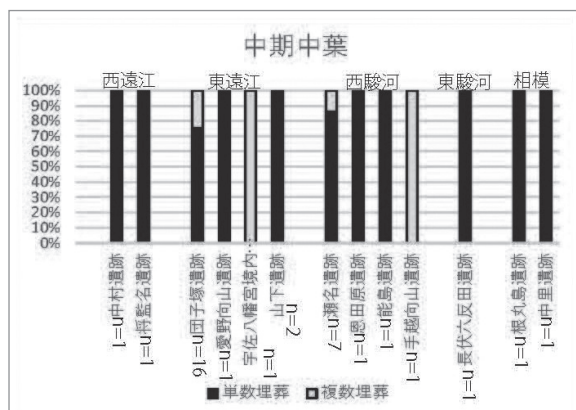


図 11 中期中葉の遺跡別埋葬手法の割合

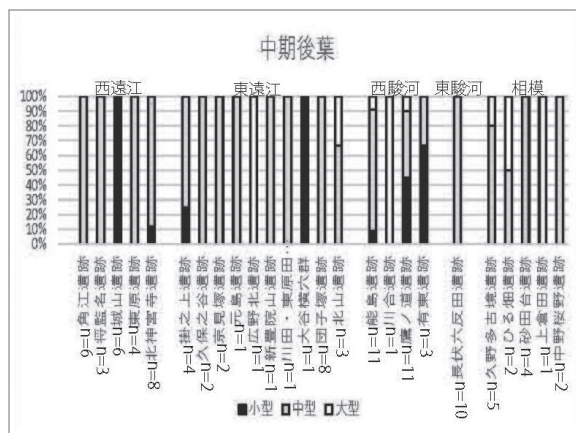


図 12 中期後葉の遺跡別大きさの割合

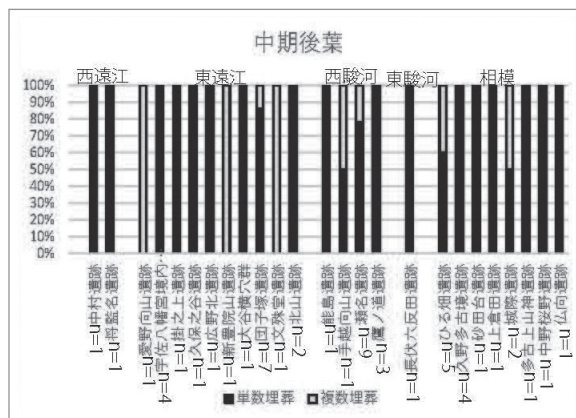


図 13 中期後葉の遺跡別埋葬手法の割合

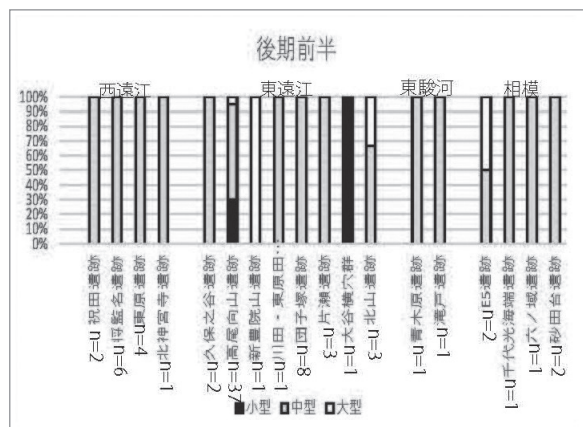


図 14 後期前半の遺跡別大きさの割合

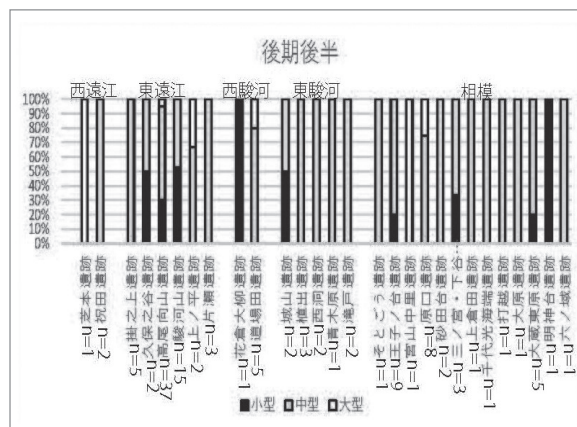


図 16 後期後半の遺跡別大きさの割合

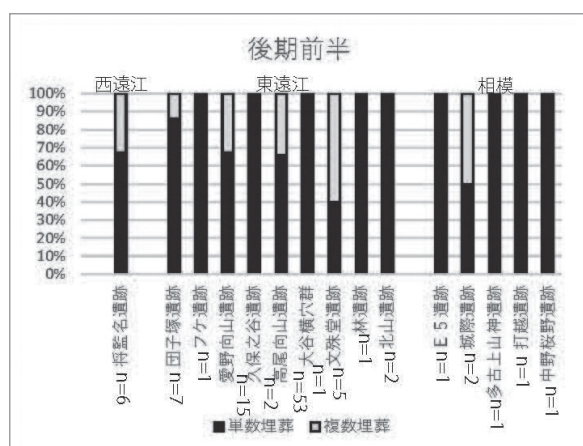


図 15 後期前半の遺跡別埋葬手法の割合

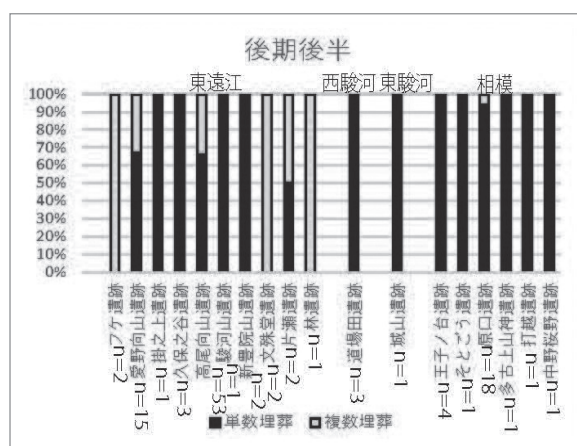


図 17 後期後半の遺跡別埋葬手法の割合

また、複数埋葬の事例が増加し、方形周溝墓 1 基における主体部の数も 4 基以上のものが確認できるようになる。ただし、これは高尾向山遺跡や文殊堂遺跡など東遠江地域で確認でき、他地域では単数埋葬が多い。複数埋葬でも東遠江地域の事例ほど 1 基における主体部の数は多くない。このことから、複数埋葬の主体部数の増加は東遠江地域特有の事象の可能性がある。しかし、東遠江地域以外は主体部の残存状況が悪く、主体部が確認できない遺跡も多いため、他の地域でも同様の事象が発生していた可能性は存在する。

立地は、小型、中型、大型のいずれも標高の高い地点での造営が多いが、中型は標高の低い地点にも若干数造営されている一方で、大型、小型は標高の低い地点には造営されることはない。しかし、中型が大型と同様の遺跡で確認できる事例も存在することから、中型に区分されるものに関しては、造営地を選別していたわけではないと考えられる。

後期後半 (図 16・17) 大型は天竜川以西まで分布が拡大しており、小型の分布域も東遠江地域から相模地域まで東に拡大している。

主体部は、木棺と土坑が主流であるが、土器棺を主体部とするものが相模地域に確認できるようになり、分布域が東へ拡大している。また、複数埋葬の割合が後期前半に比べ減少しており、1 基における主体部の数も後期前半に見られた 5 基以上のものは見られなくなり、4 基以下のものがほとんどとなる。

立地をみると、標高の高い地点での造営が多く、全体の傾向はあまり変化しない。しかし、地域ごとでは若干の差異が確認できる。西遠江地域では標高の低い地点でのみ造営されており、造営地点も後期前半に比べ北に位置するようになる。東遠江地域でも標高の低い地点での造営が確認でき、相模地域では後期前半では確認できなかった大型の方形周溝墓を標高の低い地点で造営する遺跡がわずかながら出現する。

小結 導入期である弥生中期中葉に東駿河地域では大型のものが存在する。弥生中期後葉になると大型の分布域が東遠江地域から相模地域にまで拡大する。また、弥生中期に確認できる大型の方形周溝墓は主体部数も 1 基の単数埋葬である。加えて、川合遺跡と元島遺跡を除いて、大型は小型や中型と同一墓群に混在して確

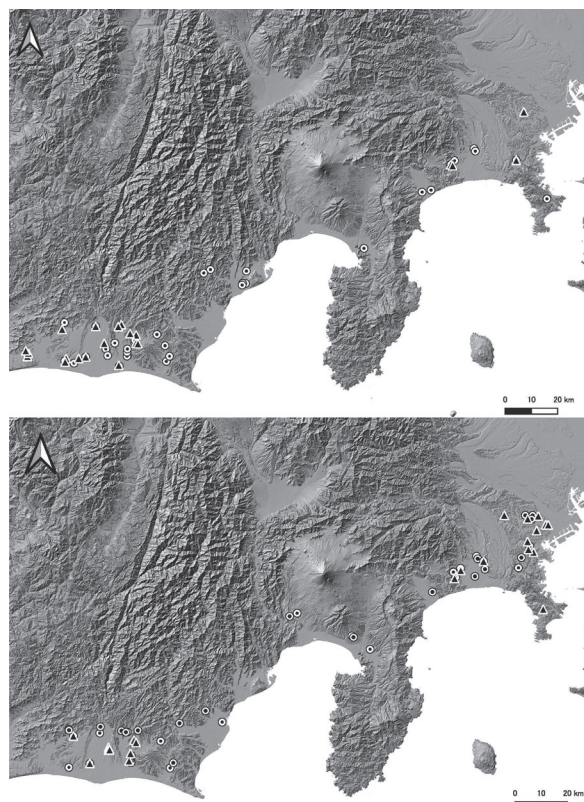


図 18 方形周溝墓と土墳墓、土器棺墓の分布図

○：方形周溝墓 △：土墳墓、土器棺墓
(上：弥生時代中期 下：弥生時代後期)

認されている上、大型同士であっても 20m を大きく超えるような、はるかに大きな超大型も存在していることから、こうした超大型はその集団のリーダー格の墓との差別化の結果こうした差異が生じたのではないかと考えられる。

弥生後期では、中期と同様、小型の存在と大型の存在に地域差が見られるが、東遠江地域と相模地域は時期に差はあるものの、小型の出現、増加という面で共通点が見られる。こうした規模の割合では 2 つの地域には共通性が見られるものの、1 基における主体部の数において両地域には明確な差異が存在する。このように、弥生後期における東遠江地域と相模地域は他地域よりも深く関係していたと考えられるが、埋葬手法という点では異なる手法をとっていたと考えられる。

また、弥生後期前半には特に東遠江地域で主体部数の増加が確認でき、こうした複数埋葬をとるものは大型が多い。中期では大型の方形周溝墓の主体部数は 1 基であったことから、大型がリーダー格との区別という面ではなく、主体部を多く入れるためという機能的意味合いに変化したのではないかと考えられる。

また、後期まで継続する遺跡に関しては、平面形態

に大きな変化が見られない北山遺跡や団子塚遺跡では規模の割合にもあまり変化は確認できないが、平面形態にも変化のあった掛之上遺跡では小型のものがなくなり大型のものが増えるという変化が見られ、大きさの変化と平面形態の変化には相関性があるのではないかと考えられる。

従来の墓制である土器棺墓と土墳墓との関係(図 18)については、遠江地域と相模地域で方形周溝墓との併存が確認できた。遠江地域では、弥生中期には方形周溝墓と同一の遺跡で確認された事例も存在するが、弥生後期に入ると同一の遺跡では確認できなくなる。しかし、方形周溝墓の確認された遺跡と従来の墓制が確認される遺跡同士は近接しており、あまり隔絶はしていないと考えられる。相模地域では、中期は方形周溝墓と土墳墓、土器棺墓が同一の遺跡で確認できる事例も見られるが、あまり数は多くなく、共存する場合も平野部以外に分布する遺跡でのみ確認されており、遠江地域で見られたような方形周溝墓の近辺に土墳墓や土器棺墓が併設される事例は確認されなかった。後期に入っても平野部を避けて造営されることは変化していないが、相模川周辺では同一の遺跡で確認できる事例が減少するものの、方形周溝墓の確認された遺跡と土墳墓、土器棺墓が確認された遺跡はあまり距離が離れていない。これがより東になると、同一の遺跡で確認されるものはなくなり、方形周溝墓と土墳墓、土器棺墓の確認される遺跡同士の距離も開くようになっていることが確認された。

(3) 単位群の分析

分類 その集団の規模及び集団の継続性を調べるために方形周溝墓の単位群についても分析を行った。本論では、周溝の共有しているものと、共有はしていなくとも隣接し方形周溝墓の主軸方向が一致しているものを同一群と判断し、単位群とする。隣接していても、明らかに主軸方向が異なる場合は同一群に含めないものとする。なお、集成結果をもとに、2～6 基未満のものを小規模群、6～10 基未満のものを中規模群、10 基以上のものを大規模群と呼称するものとする(図 5)。また、1 基しか見つかっていないものについては、調査区外にもまだ存在する可能性があるため、1 基しか検出されていないものは今回の分析対象からは除外するものとする。

中期中葉(図 19) 対象地域内では小規模群がほとんどであるが、西駿河地域でのみこの時期に中規模群が確認でき、相模地域では中里遺跡で大規模群が検出さ

れている。大井川を境に方形周溝墓の集合が確認できるものの、東駿河地域では検出例が少ないため、西駿河地域、相模地域のみの特異な事例である可能性も存在する。

分布状況には若干の地域差が見られるが、対象地域全体を通して、標高の低い地点での造営が多い。これは小規模群と中規模群、大規模群のいずれでも共通している。しかし、西駿河地域では標高の高い地点でも小規模群と中規模群での造営が確認できる。また、小規模群と中規模群、小規模群と大規模群が異なる遺跡で造営されることは確認できない。

中期後葉 (図 20) 中規模群が確認できる事例が増加し、大井川以西での検出が増加する。一方で大井川以東の西駿河地域では中規模群が検出された遺跡数が減少している。また、相模地域では中期中葉に確認できた大規模群は確認できず、小規模群がほとんどでわずかに中規模群が確認できるという状況となっている。また、全体の傾向として、中規模群は小規模群が確認された遺跡と同一の遺跡で検出されているが、西遠江地域でのみ中規模群のみを造営する事例が出現している。

分布状況については、大井川以西と以東で変化に差があり、大井川以西、特に東遠江地域では丘陵上などの標高の高い地点での造営が確認できるようになっている。しかし、小規模群と中規模群で見ると、標高による造営地点の区分分けは確認できなかった。また、西遠江地域では同一群内の方形周溝墓の大きさに大きな差が存在する事例が増加していることを確認した。一方の大井川以東では相模地域を除いて、中期中葉と比べてそこまで大きな変化は確認できなかった。しかし、中規模群が標高の低い地点で確認できないことから、小規模群と中規模群では造営地点の区分分けがされていた可能性がある。しかし、小規模群も同一の遺跡で検出されていることから、あくまで中規模群に対しての基準であった可能性がある。また、相模地域ではほとんどが標高の高い地点で造営されており、大井川以東であっても、分布状況は東遠江地域と類似している。

後期前半 (図 21) 中規模群が減少し、小規模群が多数を占めるようになることが地域全体で確認できる。しかし、東遠江地域では新たに大規模群が確認できるようになる。これは高尾向山遺跡でのみ確認できることであり、加えて弥生時代後期前半から後期後半まで周溝を共有しながら存続し、こちらは長期間継続したため、単位群が大規模化したと考えられる。

分布状況は天竜川以西と相模地域では標高の低い地

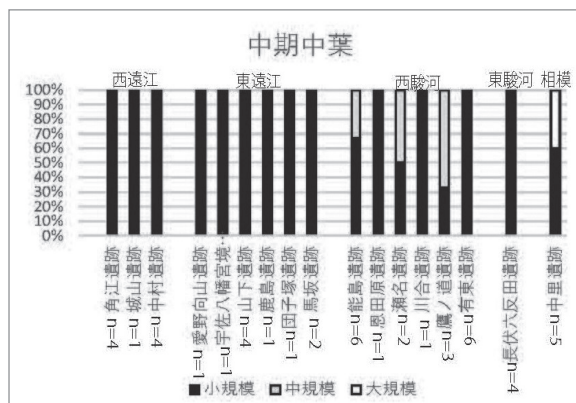


図 19 中期中葉の遺跡別群構成の割合

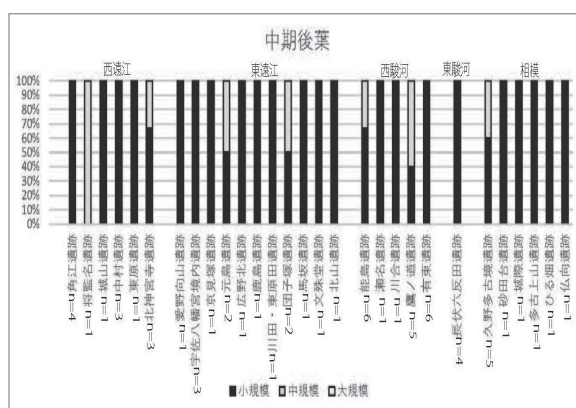


図 20 中期後葉の遺跡別群構成の割合

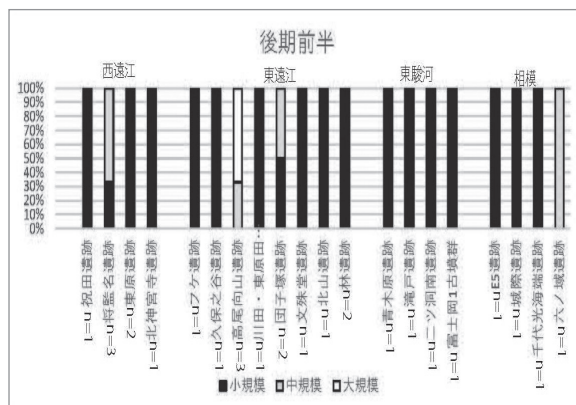


図 21 後期前半の遺跡別群構成の割合

点での造営が主流となる。一方の天竜川以東では小規模群、中規模群、大規模群のいずれも標高の高い地点で造営するのがほとんどとなる。また、天竜川以東でも西駿河地域では集成した中では方形周溝墓の検出例が非常に少ないため、天竜川が境界になっているかは確実にはいえない。

後期後半 (図 22) 大規模群の確認事例が増加し、分布域も天竜川以東から大井川以西、相模地域まで拡大することが確認できた。しかし、相模地域では中規模



図 22 後期後半の遺跡別群構成の割合

群と大規模群の検出例が他の地域に比べ多く確認できる。また、西遠江地域と西駿河地域、東駿河地域では同一群内での大きさの差が小さいものが確認できるようになる。

分布状況では後期前半で見られた全体的な傾向は確認できなくなり、より細かい地域差が確認できるようになる。西遠江地域では小規模群のほとんどが標高の低い地点で造営されており、東遠江地域は小規模群、中規模群、大規模群のいずれも標高の高い地点で造営されている。また、小規模群はわずかに標高の低い地点でも造営されている。西駿河地域では小規模群は標高の高い地点で造営され、大規模群は標高の低い地点で造営されている。これは他の規模と混合することがないため、小規模群と大規模群の住み分けが存在していた可能性が考えられる。東駿河地域では、小規模群のみが確認でき、そのほとんどが標高の高い地点に造営されている。相模地域では、小規模群は標高の高い地点に造営されることが多く、中規模群と大規模群は小規模群に比べて標高の低い地点で造営されている。しかしながら、中規模群と大規模群が確認された遺跡では小規模群も同様に確認されていることから、中規模群と大規模群を造営できる規模の集団と小規模群を造営する集団の間には大きな隔絶はないのではないかと考えられる。

小結 全体の傾向として小規模群が主流となっており、これは中期と後期に共通している。しかし、中期中葉に西駿河地域では中規模群、相模地域では大規模群が確認されている。西駿河地域では、能島遺跡と鷹ノ道遺跡のように弥生中期中葉から弥生中期後葉まで継続する遺跡で確認できているが、相模地域の中里遺跡では弥生中期中葉でのみ大規模群が確認されている。このことから、導入段階での中規模群や大規模群の意味合いには地域で違いが存在した可能性がある。西駿河

地域では弥生時代中期を通じて存続することから、方形周溝墓を造営する集団が長期的に継続していた結果大規模群になったのに対し、相模地域では弥生中期中葉の間に大規模群が構成されていることから、方形周溝墓を造営する集団規模が他地域に比べ大規模であった可能性が考えられる。また、弥生中期後葉に、中規模群の分布域が東西に拡大し、西遠江地域から相模地域でも確認されるようになる。このことから、東駿河地域以外では方形周溝墓を造営する集団が継続性の高い集団へと変化あるいは入植したことで、中規模群が確認できるようになったのではないかと考えられる。

弥生後期では、中期と同じく小規模群がほとんどなのは全ての地域で共通して確認できるが、東遠江地域では弥生後期前半に大規模群が確認され、後期後半には西駿河地域、相模地域まで大規模群が確認されるようになり、大規模群の分布域が天竜川より東に向かって拡大するという現象を確認した。弥生後期に確認できた大規模群や中規模群について、西駿河地域は後期前半に方形周溝墓が激減するという、一時期の断絶があることから、中期に存在した集団がさらに大規模化したのではなく、新しく入植した集団が大規模群を形成しうる継続性の高い集団、ないしは大規模な集団であったと考えられる。また、東遠江地域と相模地域では西駿河地域で確認できる方形周溝墓の断絶期はないものの、平面形態が中期と大きく異なるという変化が確認できることに加え、弥生後期に中規模群や大規模群が確認された遺跡は中期後葉には方形周溝墓が確認できないこと、あるいは中規模群以上が確認できない遺跡であることから、中規模群や大規模群を形成していた集団は中期に中規模群や大規模群を形成していた集団とは異なるものと推定される。

(4) 副葬品の分析

副葬品を伴う埋葬儀礼が存在する文化圏に違いはあるのか、また副葬自体がもつ意味合いに違いはあるのかを調べるために、方形周溝墓から出土した副葬品の分析を行った。また、ここでの埋葬品には鉄器や管玉等の玉類、ガラス製品がある。

中期中葉 この時期の方形周溝墓から副葬品は確認できない。

中期後葉 2例副葬品を伴う方形周溝墓が確認できた。確認できた遺跡は東遠江地域の北山遺跡と文殊堂遺跡で、前者は管玉を、後者はガラス製品を副葬する。北山遺跡では、方形周溝墓の主体部は1基で、大きさは短辺 18m、長辺 22m の大型に該当する。文殊堂遺跡

では大きさの特定はできず、主体部が3基確認できる方形周溝墓から出土している。

後期前半 副葬品を伴う方形周溝墓の確認事例が増加し、西遠江地域と相模地域でも確認させるようになる。また、鉄器が確認できるようになる。

さらに、中型でも副葬が行われる事例が確認でき、将監名遺跡では中型にガラス玉が副葬されている事例を1例確認した。しかし、ほとんどは大型に分類されるものに副葬が行われている。

単数埋葬と複数埋葬の両方に副葬が確認でき、将監名遺跡、高尾向山遺跡では複数埋葬の方形周溝墓に副葬が行われ、文殊堂遺跡、林遺跡、E5遺跡では単数埋葬の方形周溝墓に副葬が確認できた。また、鉄器の副葬は単数埋葬にのみ確認できた。

後期後半 中型に分類されるものに副葬が行われる事例が増加し、東駿河地域でも確認されるようになる。具体的な遺跡は愛野向山遺跡、植出遺跡、打越遺跡、そとごう遺跡、原口遺跡である。また、道場田遺跡では大型で単数埋葬の方形周溝墓にガラス玉を副葬している事例を1例確認した。

また、複数埋葬のものはフケ遺跡で2例、愛野向山遺跡で1例確認され、単数埋葬のものは愛野向山遺跡、駿河山遺跡、道場田遺跡、植出遺跡、打越遺跡、そとごう遺跡、原口遺跡でそれぞれ1例ずつ確認された。

さらに、そとごう遺跡では土器棺に副葬する事例も確認された。

小結 対象地域の方形周溝墓導入期である中期中葉には副葬品が伴わないことから、副葬の出現と方形周溝墓を造営には若干の時期差が存在するということがいえる。また、中期後葉に副葬をする事例が確認できるようになるが、これは東遠江地域に出現している。さらに、東遠江地域は後期に入ると他地域に比べより多くの方形周溝墓で副葬がみられるようになることから、方形周溝墓に副葬をする文化は東遠江地域から広がっていった可能性が考えられる。

後期では管玉、ガラス玉に加え、鉄剣や鉄釧といった鉄製品の副葬が見られるようになる。しかし、中期に比べ副葬事例が増加したとはいえ、方形周溝墓全体から見ると圧倒的に少ない。また、副葬の事例が少ないため地域差といえるかは定かではないものの、東遠江地域では副葬が存在する方形周溝墓はガラス製品でも鉄製品でも大型、ないしは大型に準ずる大きさのものであるのに対し、東駿河地域、相模地域では鉄製品は大型、ガラス製品は中型という副葬と規模を分けている事例が見られる。このことから、富士川より以東

では副葬品、すなわち被葬者によって方形周溝墓の大きさの区別がされていた可能性が考えられる。

また、副葬品が確認できる主体部はそのほとんどが木棺、土坑であり、同一の方形周溝墓に土器棺がある場合でも土器棺に副葬品が確認される事例は1例のみ確認できており、非常に少ない。松井や藤井の研究(松井2010、藤井2005・2015)から土器棺が乳幼児のための主体部であるという考えを基にするのならば、方形周溝墓に埋葬されるような選ばれた乳幼児であっても、副葬されるのは成人のみという区分けがされていたと考えられる。

副葬品としてガラス玉が管玉や鉄製品に比べ多く存在するという結果が得られたが、先行研究からガラス製品の製造遺構は近畿地域と北部九州地域に集中しており(村串2022)、対象地域に関しても植出北遺跡でガラス玉の鋳型と考えられる遺物が1点出土しているのみ(大谷2022)で、今回対象としている地域ではガラス製品をほとんど作っていないと考えられる。そのため、ガラス玉を副葬できた人物というのは、近畿地域や北部九州地域と交易等でつながりがあった人物と考えられ、また同一の単位群のなかでも、ガラス玉の副葬がみられるのはごく少数であることから、被葬者はかなり限定的な人物であったと推察される。

4. 考察

(1) 該当地域の導入期の共通性と後期の形状変化の地域性

今回対象とした地域では、いずれの地域でも方形周溝墓は弥生中期中葉から確認できるようになる。また、検出される方形周溝墓はそのほとんどが四隅切れ型の平面形態である。さらに、東駿河地域の上原遺跡や相模地域の方形周溝墓から、東遠江地域の中期中葉に属する嶺田式土器や東海系の土器が確認できることと、中期中葉以前に現在の三重県や愛知県では既に四隅切れ型の方形周溝墓が確認できることから、方形周溝墓は尾張地域、あるいは伊勢湾周辺から西遠江地域へ伝播した後、東遠江地域～相模地域へと伝播したという、西から東へ伝播したと考えるのが妥当だと考えられる。この伝播は弥生中期中葉の間に行われており、伝播速度は比較的早いものであったと考えられる。

また、遠江地域と駿河地域で特によく確認されている事例として、方形周溝墓の分布域に偏りが存在することが確認できた。遠江地域と駿河地域では平野部が多く存在する南部に方形周溝墓が造営される遺跡が集中しているのに対し、平野部がなく、標高の高い山間

部の多い北部に方形周溝墓が造営される遺跡がほとんど確認されていないのである。これは、先行研究で言われているように、方形周溝墓導入期と水稻耕作の導入が重なる（篠原 2010・2023）ことから、西からきた集団は方形周溝墓を造営する埋葬文化と水稻耕作を行う文化の両方を持っていた可能性が高いことが考えられる。そのため、水稻耕作を行いやすい平野部が近くになく、水稻耕作自体を行いにくい山間部ではこの集団が根付かず、結果として方形周溝墓も導入されなかったのではないかと推定される。

弥生後期に入ると全ての地域で四隅切れ型をとっていたのが、四隅切れ型が激減することは共通であるものの、平面形態の種別割合を確認すると地域差が存在することが分かった。また、四隅切れ型が見られなくなることは各地域で共通していることではあるものの、後期に入っても四隅切れ型を使用している遺跡も存在しており、こうして継続して利用している遺跡は中期にも方形周溝墓が確認できる遺跡が多い。さらに、朝日遺跡など遠江地域より西部で方形周溝墓が確認できる遺跡でも同様の平面形態の変化が確認できることから、後期にまた新たな集団が流入し、その集団の方が多数派となったために四隅切れ型がとられなくなったと考えられる。

また、後期には平面形態のみならず、主体部の数や方形周溝墓の大きさにも変化が見られるようになる。弥生中期では、大型であろうとも主体部は1基、複数でも2、3基であったのが、後期に入ると5基以上の主体部を持つものが出現し、こうした複数の埋葬施設を持つものは大きさも大型のことが多い。今回対象とした地域では、比較的主体部が多く残存しているのが東遠江地域なので、この傾向が捉えられたのはこの地域のみで、全体に見られた変化とはいいいがたいため、注意が必要ではあるものの、主体部がある程度残存していた相模地域の方形周溝墓では中期と後期で主体部の数、および規模との相関関係に変化は見られなかったため、東遠江地域が特異な埋葬思想や手法を持っていたか、相模地域が前述の異なる集団の流入を受けても、弥生中期から存在する埋葬思想や手法は保ち続けたということが考えられるのではないかと推察している。

さらに、弥生中期ではほとんどが小規模群を構成しており、中期後葉に中規模群の分布域が拡大し、後期後半になると大規模群の分布域が拡大するという結果が得られた。また、弥生後期に大規模群が確認できるのは、中期に中規模群を形成し得た地域に限られると

いうことも確認できた。こうした、大規模群がその集団の規模の大規模化や継続性を示すのならば、東遠江地域、西駿河地域、相模地域はこうした集団を受け入れる基盤が存在していたと考えられる。西駿河地域は後期前半には方形周溝墓が見られない断絶した時期があるため、中期の集団が大規模化ないしは継続していたとは考えられない。東遠江地域と相模地域は西駿河地域のような明確な断絶がないため、中期の集団が続いた可能性は否定できないが、中期と後期の間に平面形態の大きな変化が起こることから、中期に存在したものと異なる集団が大規模化、長期間継続下結果大規模群構成したと考えている。

さらに、副葬品について後期前半にガラス玉、鉄剣等の鉄製品の副葬が出現し、後期後半にも継続している。特にガラス製品に関しては、東遠江地域で顕著に見られる。また、遠江、駿河、相模地域ではガラス製品の製作遺構ないしは関連遺物もほとんど確認できないこと（大谷 2022）、ガラス製品の生産遺構は北部九州と近畿北部に集中していることから（村串 2022）、副葬されたガラス製品は3地域内で製造されたものではなく、外部から持ち込まれたものであり、ガラス製品の副葬の多い東遠江地域にガラス製品を入手可能なルートを持つ人物が多く存在していた可能性が高いと考えられる。また、副葬が見られる方形周溝墓は大型で複数埋葬をとるのものが多く、全ての方形周溝墓、ないしは主体部に副葬されてはいないということから、こうした副葬品によって交易を担っていた中心人物、ひいては集団のリーダー格を区別したのではないかと考えられる。しかし、相模地域では鉄製品は大型、ガラス製品は中型の方形周溝墓に副葬している上、1基の主体部数の増加も確認できないことから、東遠江地域とは異なる埋葬思想をもっていたと考えられる。

このように、四隅切れ型の激減と地域差の顕在化という平面形態の変化、主体部数の増加、大規模群の再出現、ガラス玉等の副葬品の増加から中期後葉と後期前半の間に大きな画期が存在するということが分かった。しかしながら、こうした変化は後期に入ってから急速に変化したわけではなく、中期後葉の段階で全周型や隅切れ型が出現することから、後期に入ってから社会が大きく変わったことは間違いないが、中期後葉の時点で小さな変化は既に発生していたと考えられる。そして、後期に入ってから発生した大きな変化は、外部から別の集団が流入したことによって、中期から存在していた集団が塗り替えられた結果として発生したと考えられ、方形周溝墓が存在するしないにかかわらず、中期と後

期の間には程度の差はあれど、集団の一種の断絶が存在したと考えられる。

（2）方形周溝墓の地域間の関係性

これまで複数の項目から方形周溝墓の分析を行ってきたが、弥生中期では大きさや平面形態に若干の地域差は見られるが、全ての地域で四隅切れ型をとるように、全ての地域内で一定の共通認識を持っていたと考えられる。また、弥生中期中葉に該当する東駿河地域の上原遺跡では東遠江地域に多く見られる嶺田式土器が出土している。さらに、相模地域の中里遺跡では、伊勢湾岸地域に見られる貝田町式土器が出土しており、これは西駿河地域の瀬名遺跡でも出土している土器である。中里遺跡では瀬戸内地域や摂津地域など他地域からの搬入土器が確認されている（石川2001）が、西駿河地域とも交流を持っていたと考えられる。

このように、弥生中期では搬入土器から地域間で交流していたと考えられるものの、平面形態はほとんど共通であり、主体部の数も単数埋葬を主としており、西駿河地域は異なるものの、大きさに関しても中型が多いという、方形周溝墓の造営に関する一定の共通認識をもって造営していると考えられる。しかし、弥生後期に入ると、四隅切れ型が激減するとともに弥生中期で見られた共通性、特に平面形態の共通性がなくなり、大井川を境とした東西の地域というより狭い範囲での共通性が見られるようになる。大井川以西では後期前半に四隅切れ型が継続して造営されているが、大井川以东では四隅切れ型がほとんど見られなくなる。これは大井川を境にこれまで方形周溝墓を営んでいた集団の変化が西と東で時期差が存在していたと考えられる。また、後期後半になると大井川以西でも四隅切れ型がほとんど見られなくなることから、新しい集団が大井川以西でも根付いたために変化したと考えられるが、大井川以西に含まれる東遠江地域では後期後半に相模地域でのみ確認されていた辺切れ型の方形周溝墓が検出されるようになること、ガラス玉等のガラス製品や鉄製品という副葬品が比較的多く確認できることから、相模地域の方形周溝墓を造営する集団が東遠江地域に流入、ないしは影響を与えたと考えられ、その結果東遠江地域でも大井川以东と同様の変化が起きたのではないかと考えられる。すなわち、東遠江地域と相模地域は他地域に比べ、地域間の関係性が高かったと考えられる。

このように、弥生中期と異なり、弥生後期では方形

周溝墓自体からより狭い範囲での地域間の共通性が確認できるようになる。その結果として辺切れ型という特異な形態の共有という事例の存在を確認した。この辺切れ型は東遠江地域と相模地域でも検出数が少ないため、あくまで1遺跡同士のつながりであったという可能性も否めないが、すくなくとも四隅切れ型の激減は大井川以东がはじめて、以西は遅れるということは分かっているため、弥生後期における変化は、方形周溝墓の導入と異なり、東から西へ変化した可能性が考えられるのである。

（3）被葬者の力関係と方形周溝墓の大きさ

被葬者の力関係を示すものとして、方形周溝墓自体の大きさが深く関係していると考えられる。これまでの研究で、方形周溝墓に埋葬される人物はその集団の全ての構成員が埋葬されたのではなく、選別されていたと考えられている。今回の集成結果では、同一の遺跡、同一の単位群内で小型と大型が確認されるということに、大きさの差が激しいものが存在するということが分かった。大きいものはそれだけ造営するのに労力が必要となり、加えて同一墓群内で大きさの差が激しいものがあり、さらにこの時期には副葬品もないことから、大きいものに集団の中でもリーダー格の人物が他の人物とは区別されて埋葬されていたと推測される。中期中葉の段階で西駿河地域ではこの差が激しく、他の地域では中型とした範囲で差がある事例も存在するが西駿河地域ほど激しくなく、中期後葉も同様であることから、西駿河地域は他の地域に比べ、被葬者同士の力関係を強く意識した社会であったと考えられる。

これが弥生後期に入ると、複数埋葬の増加に伴う方形周溝墓の大型化が見られ、加えて副葬品の検出事例が増加する。これは被葬者の力関係を示すものが方形周溝墓自体の大きさだけでなく、副葬品を持つことができるか否かも含まれるようになったと考えられる。特に副葬品は、同一の方形周溝墓であっても、副葬品が出土する主体部とそうでないものがみられるようになる。複数埋葬の増加はリーダー格の人物も他の人物と同一の方形周溝墓に埋葬されるようになり、そのリーダー格とそのほかの人物を区別するものとして鉄製品やガラス製品を副葬したと考えられる。しかし、相模地域では単数埋葬を継続しており、大きさと副葬品の種別に相関性が確認できることから、遠江、駿河地域に比べ、被葬者同士の区別を明確にしていたと考えられる。

おわりに

本論では、遠江、駿河、相模地域の方形周溝墓を集成し、それを複数の項目から分析を行ってきた。その結果、方形周溝墓は弥生中期中葉に遠江から相模地域の西から東へ素早く伝播したということが分かった。これが後期に入ると、方形周溝墓の形態が大きく変わるという変化が起き、これは逆に東から西へ変化が発生するという異なる伝播をした可能性が存在することが新たに分かった。また、後期には被葬者同士の力関係による区別など地域差が存在する一方で、辺切れ型など小地域同士のつながりが存在することから、小地域で独自の方形周溝墓を造営しつつも他地域とも人の交流が行われていたということが改めて分かった。

今回は集落遺跡との関係性について論じることができなかったため、これは次に論題としたいと思う。

謝辞

最後にこの論文は私の修士論文をもとにして作成したものであり、修士論文を作成する上で長友先生には大変お世話になったので、この場でお礼を述べさせていただく。また、矢野先生には講義でも大変お世話になった。ご退職後もますますの活躍を願って、謝辞の言葉とさせていただきますと思う。

引用文献

- 赤塚次郎 2005 「東海の方形周溝墓と前方後方墳」『季刊考古学 92 号』 雄山閣 pp.66-69
- 井口美奈 2023 「西部の様相」『静岡県考古学会 2022 年度シンポジウム弥生時代墓制の変化と社会』静岡県考古学会 pp.78-86
- 石川日出志 2001 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学第 113 号』駿台史学会 pp.57-94
- 石川日出志 2023 「東日本の弥生時代の墓について」『登呂博物館令和 4 年度特別展図録 静岡に眠る弥生時代の開拓者』静岡市立登呂博物館 pp.38-45
- 石黒立人 1988 「愛知県の弥生時代墓制についてのメモ」『第 9 回三県シンポジウム東日本の弥生墓制』北武蔵古代文化研究会 pp.5-6
- 石黒立人 2006 「伊勢湾周辺地域における弥生時代の土器棺墓 覚書 '05」『墓場の考古学 第 13 回東海考古学フォーラム』第 13 回東海考古学フォーラム実行委員会 pp.94-100
- 石黒立人 2009 「四隅切れ方形周溝墓」原論『方形周溝墓の埋葬原理：考古学研究フォーラム記録集』鯖江市教育委員会 pp.21-44

- 石黒立人 2016 「方形周溝墓の時期決定をめぐる二、三の問題：伊勢湾岸域を中心として」『研究紀要 17 号』愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター pp.39-48
- 伊丹徹 1988 「相模の方形周溝墓」『東日本の弥生墓制：再葬墓と方形周溝墓』北武蔵古代文化研究会 pp.124-139
- 伊丹徹・大島慎一・立花実 2002 「6 相模地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社 pp.705-843
- 伊藤敏行 1996 「群構成論」『関東の方形周溝墓』同成社 pp.331-348
- 井上裕弘・大塚初重 1969 「方形周溝墓の研究」『駿台史学 29 号』駿台史学会 pp.39-110
- 後川恵太郎 2009 「方形周溝墓の墳丘構築法について」『方形周溝墓の埋葬原理：考古学研究フォーラム記録集』鯖江市教育委員会 pp.11-20
- 会下和宏 2015 『墓制の展開に見る弥生社会』同成社
- 大賀克彦 2010 「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊文化財 566』国立歴史民俗博物館 pp.27-35
- 大場磐雄 1973 「方形周溝墓の発見と意義」『宇津木遺跡とその周辺—方形周溝墓初発見の遺跡』考古学資料刊行会 pp.52-81
- 大庭重信 2005 「方形周溝墓制の埋葬原理」『月刊考古ジャーナル 534 号』ニューサイエンス社 pp.5-8
- 大谷宏治 2022 「沼津市植出北Ⅱ遺跡出土ガラス勾玉 鎔范をめぐる」『研究紀要第 8 号』静岡県埋蔵文化財センター pp.9-24
- 大屋道則 1991 「方形周溝墓の一視点 (1)」『研究紀要第 8 号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.1-8
- 及川良彦 2005 「方形周溝墓群と集落群の混在からみえてくるもの」『季刊考古学 92 号』雄山閣 pp.86-90
- 金井塚良一 1972 「関東の方形周溝墓—方形周溝墓の社会構成史的検討」『考古学研究 18 巻 4 号』考古学研究会 pp.40-78
- 川添和暁 2000 「東海地方の縄文晩期後葉から弥生前期の墓制」『弥生の墓制 (1) - 墓制から見た弥生文化の成立』埋蔵文化財研究会 pp.19-30
- 清家章 2009 「古墳時代における父系化の過程」『考古学研究 56 巻 3 号』考古学研究会 pp.55-70
- 黒澤浩 1996 「弥生墓制の中の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』同成社 pp.9-29
- 黒澤浩 2006 「墓場の変容～再葬墓から方形周溝墓へ～」『墓場の考古学 第 13 回東海考古学フォーラム』第 13 回東海考古学フォーラム実行委員会 pp.73

-80

黒澤浩 2015「東海地域の方形周溝墓の展開」『月刊考古学ジャーナル 674 号』ニューサイエンス社 pp.9-12

小泉祐紀 2023「静岡県域における弥生時代の墓制の変化」『登呂博物館令和4年度特別展図録 静岡に眠る弥生時代の開拓者』静岡市立登呂博物館 pp.54-61

甲元真之 1979「弥生時代の墓制」『日本考古学を学ぶ-原始・古代の社会』有斐閣 pp.55-70

小林三郎 1979「古墳の発生と終末」『日本考古学を学ぶ-原始・古代の社会』有斐閣 pp.71-87

近藤義郎 1968「前方後円墳の成立と変遷」『考古学研究 15 卷 1 号』考古学研究会 pp.24-32

坂口滋皓 1991「東日本弥生墓制における土器棺墓(1) 研究史の再検討を中心として」『神奈川考古第 27 号』神奈川考古同人会 pp.71-100

坂口滋皓 1992「東日本弥生墓制における土器棺墓(2) 関東地方の様相を中心として」『神奈川考古第 28 号』神奈川考古同人会 pp.1-41

篠原和夫ほか 2002a「5 遠江・駿河地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社 pp.520-700

篠原和夫 2010「東海東部の様相」『方形周溝墓の埋葬原理Ⅱ東日本の弥生墓制』鯖江市教育委員会 pp.79-94

篠原和夫 2023「東海東部の弥生墓制の変化と農耕社会の展開」『静岡県考古学会 2022 年度シンポジウム 弥生時代墓制の変化と社会』静岡県考古学会 pp.4-11

沢田大多郎 1967「古墳発生前における社会-南関東の場合」『考古学研究 14 卷 1 号』考古学研究会 pp.5-17

静岡県埋蔵文化財センター 2021『ふじのくに考古通信 vol.21』静岡県埋蔵文化財センター

下津谷達男 1967「方形周溝墓とその提起する諸問題」『歴史教育第 15 卷 3 号』歴史教育研究会 pp.20-36

立花実 2005「方形周溝墓の埋まり方と祭祀の段階」『季刊考古学 92 号』雄山閣 pp.80-85

内藤晃 1967「弥生時代末期の墓制」『日本史研究 91 号』日本史研究会 pp.67-70

中嶋郁夫 1988「静岡県の弥生時代の墓制」『第 9 回三県シンポジウム東日本の弥生墓制』北武蔵古代文化研究会 pp.617-671

中村大介、秋山浩三 2004「方形周溝墓研究と近畿弥

生社会復原への展望 瓜生堂遺跡ほか河内湖周辺における弥生墓制の位置づけ」『財団法人大阪府文化財センター調査報告書 106: 瓜生堂 1』財団法人大阪府文化財センター pp.499-542

中村大介 2015「朝鮮半島における周溝墓の展開」『月刊考古学ジャーナル 674 号』ニューサイエンス社 pp.30-33

福田聖 2000『方形周溝墓の再発見』同成社

福田聖 2003『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』六一書房

福田聖 2005「方形周溝墓における共通性」『月刊考古学ジャーナル 534 号』ニューサイエンス社 pp.22-25

藤井整 2005「畿内の方形周溝墓制」『季刊考古学 92 号』雄山閣 pp.62-65

藤井整 2015「近畿地方の墓制研究 50 年」『月刊考古学ジャーナル 674 号』ニューサイエンス社 pp.22-25

古屋紀之 2023「南関東の方形周溝墓」『静岡県考古学会 2022 年度シンポジウム 弥生時代墓制の変化と社会』静岡県考古学会 pp.12-38

前田清彦 1991「方形周溝墓平面形態考」『古代文化 43 卷 8 号』古代学協会 pp.25-37

松井一明 2008「静岡県における方形周溝墓と土器棺墓上 県内土器棺墓分析編」『静岡県考古学研究 40 号』静岡県考古学会 pp.93-106

松井一明 2010「静岡県における方形周溝墓と土器棺墓下 考察編」『静岡県考古学研究 41・42 号』静岡県考古学会 pp.63-76

水野正好 1972「古墳発生の論理(1)」『考古学研究 18 卷 4 号』考古学研究会 pp.26-39

溝口孝司 2017「甕棺の地域性の発現様態の基本構造とネットワーク」『日本考古学 44 号』日本考古学協会 pp.47-63

宮腰健司 2010「東海西部の様相～四隅切れ方形周溝墓以後～」『方形周溝墓の埋葬原理Ⅱ東日本の弥生墓制』鯖江市教育委員会 pp.63-77

村串まどか 2022「植出北Ⅱ遺跡・植出遺跡出土ガラス関連資料の科学的調査」『研究紀要』第 8 号静岡県埋蔵文化財センター pp.1-8

毛利舞香・小泉祐紀 2023「中部の様相」『静岡県考古学会 2022 年度シンポジウム 弥生時代墓制の変化と社会』静岡県考古学会 pp.64-73

山岸良二 1981『方形周溝墓』ニューサイエンス社

若林邦彦 2005「方形周溝墓群と集落」『月刊考古学ジャーナル 534 号』ニューサイエンス社 pp.9-13